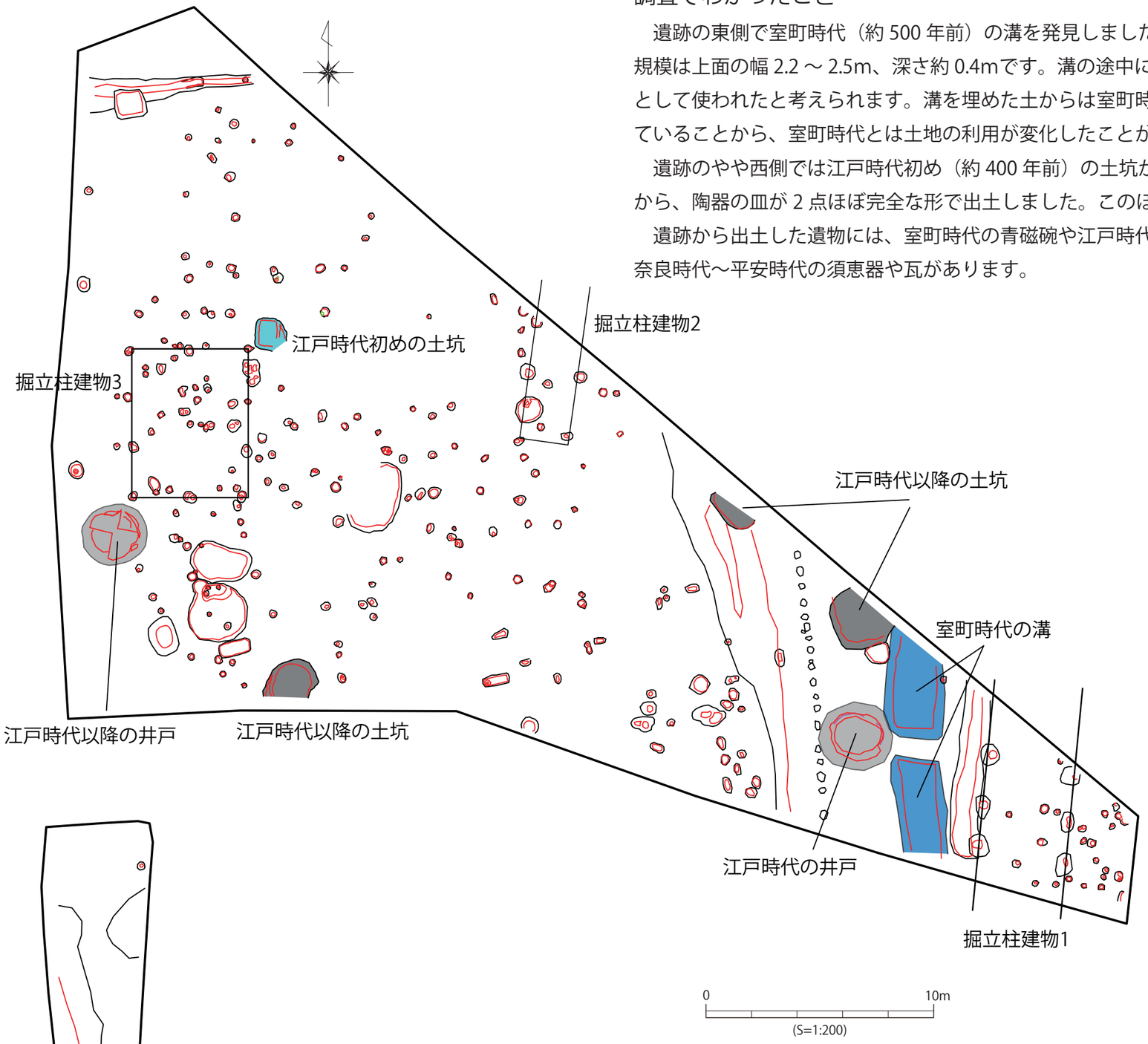
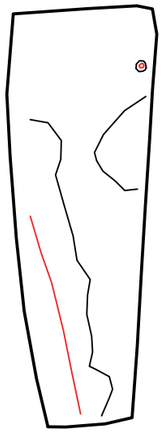
調査でわかったこと

遺跡の東側で室町時代（約 500 年前）の溝を発見しました。南北方向に延びており、屋敷地を区画するための溝と考えられます。規模は上面の幅 2.2 ～ 2.5m、深さ約 0.4mです。溝の途中には幅 1mの陸橋状に掘り残した部分があり、屋敷地の内外をつなぐ通路として使われたと考えられます。溝を埋めた土からは室町時代の青磁碗が見つかりました。この陸橋部には江戸時代に井戸が掘られていることから、室町時代とは土地の利用が変化したことがうかがわれます。

遺跡のやや西側では江戸時代初め（約 400 年前）の土坑が見つかりました。長さ約 1.3m、幅約 1.1m、深さ約 0.5mの土坑の底から、陶器の皿が 2 点ほぼ完全な形で出土しました。このほか、掘立柱建物跡を 3 棟確認しました。

遺跡から出土した遺物には、室町時代の青磁碗や江戸時代初めの陶器の皿のほか、室町時代の備前焼のすり鉢や素焼きの皿、奈良時代～平安時代の須恵器や瓦があります。





下黒田 II 遺跡全体図（S=1/200）

江戸時代初めの土坑

室町時代の溝の土層

掘立柱建物 1 の柱穴